

第 147 回山口西田読書会(2017 年 7 月 8 日)
第 146 回 (同年 6 月 24 日) のプロトコル

『思索と体験』より「論理の理解と数理の理解」旧全集版 263 頁左から 6 行目「次に純論理的対象たる…」より、264 頁左から 2 行目「思惟の無限性に由るのである」まで。

1. テキスト要約

数学における「無限の系列」は思惟の中に求めなければならない(「認識論に於ける純論理派の主張について」によれば、「自覚の事実」に本づく。234 頁)。ヘーゲルの無限は己自身にて分化発展するものである。しかしロイスはこの定義を不正確として、数学者のカントルやデデキントなどの考えを最も明確な無限の定義と考えている。デデキントによれば「或体系が自分の中に自分を写し得る時に無限である、ロイスの自己代表的関係が無限である」。

それでは如何なるものが自己代表的体系であるか。ヘーゲルが「我」を向自有の例としたように、デデキントも「自分の思想の対象となり得る自分の思想界は無限である」としている。

2. 議論要約

最初に前回のプロトコルが唐露氏によって発表された。続いて佐野がこれまでのプロトコルの背景となる西田の思想について解説を行った。

ヘーゲル『大論理学』の「向自有」の章の最初の部分を輪読した。

デデキントの無限の定義に関しては、「 S が無限 $\Leftrightarrow S$ と S の真部分集合 S' の間に全単射が存在する」と定式化された。例えば S を自然数の集合とし、 $\phi(s) = 2 \times s$ とすると、 $1 \rightarrow 2, 2 \rightarrow 4, 3 \rightarrow 6 \dots$ という全単射が成立するが、 $2, 4, 6, \dots$ は S の要素であるため、集合 $S' = \{2, 4, 6, \dots\}$ は S の真部分集合である。従って S は無限であることになる。

また思想界の無限の証明に関する部分の訳を次のように改めた。

「私の思考の世界、即ち私の思考の対象となる事物の全体 S は無限である」
この場合「私の思考の対象となる事物」が S の要素 s である。

3. 宿題

定理「私の思考の世界、即ち私の思考の対象となる事物の全体 S は無限である」を証明せよ。これは「或物が自分の思想の対象となることが出来るという思想はまた自分の思想界に属するのである。我々は我々の反省的意識に於いて、自己を思惟の対象とすることを又自己の思惟の対象とすることが出来る」をどう理解するかの問題である。